

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2010年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院異文化コミュニケーション 研究科 異文化コミュニケーション 専攻		
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科 後期課程1年	池田恭子 印	
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科 教授	野田研一 印	
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
<b>研究課題名</b>	海洋教育における伝統知と現代技術の融合の可能性－ハワイ・日本間の教育交流を例に		
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科 後期課程1年	池田恭子	
<b>研究期間</b>	2010 年度		
<b>研究経費</b>	200千円		

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

博士後期課程では、「人間と自然のかかわり」の変化を、海においてこの関わりを媒介する船と航海術（法）を通して考察し、人間と自然の関係性の再考が要求される「持続可能な社会」を考えるうえでのてがかりとしたい。本研究はその教育現場での事例研究として、研究代表者がコーディネーターをつとめる近代的航法を学ぶ日本の商船高等専門学校が、現代的航海計器を一切用いない伝統航海術を教えるハワイ州立のコミュニティーカレッジで学ぶ教育プログラムを考察する。具体的には、主にこのプログラムを企画した教員そして参加学生へのインタビューを行い、その彼らの語りから、海洋教育における伝統知と現代技術の融合の可能性と持続可能な社会に向けたこれからの教育への示唆についてみていく。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[人間と自然] [海] [持続可能性]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

2010年度のSFR研究の活動は以下のようにまとめることができる。

## 1) 2010年4月～6月

2010年3月にハワイで行われた第一回目のプログラムの参加者10人向けのアンケートをとり、プログラムのコンテンツに関する評価や感想などを聞く。このアンケートはプログラムの評価そして来年度踏襲すべき点、修正すべき点などを抽出することと、学生たちがプログラムのどの部分で何を感じ、学んだのかをみるのが目的。また、自由筆記で書いてもらったエッセイも参考にした。これらをもとにプログラムの報告書を作成し、また後のインタビュー調査の設問の参考にした。

また、日本の高等海洋教育の歴史的変遷を文献そしてインタビューで調査。練習船の大型化や、高度航海技術への傾倒などには、技術革新や、高度経済成長や海運業界を取り巻く環境の変化という時代背景、また、霧島丸の事故という偶発的な要因があったことが分かった。現在の状況を否定的にみる場合、そこに至った道のりも批判的に見がちだが、今回調査してみて、今日に至る過程には「よかれ」という思いや「安心、安全」を求める気持ちが強くあったことが分かった。

## 2) 2010年7月末～8月半ば

3月にハワイのプログラムに参加した10人のうち2人が、8月後半に予定されている、ハワイで学んだ伝統航海術を活かした佐渡への航海の準備およびトレーニングで再びハワイへいくことになった。その学生の航海訓練で参与観察およびインタビュー調査を実施。また、同行したこのプログラムの発起人である教員へのインタビューも行う。また、3月のプログラムの受け入れ側の教員たちを訪問し、今後のプログラムの改善点や、異なる学びのプロセスを経てきた学生(日本学生とハワイ学生)たちが学び合える環境をつくるかなど協議する。

## 3) 2010年8月後半

3月にハワイのプログラムに参加し伝統航海術を学んだ学生たちを中心に富山県新湊港から新潟県佐渡まで現代的な航海計器をもちいずに航海を行った。その航海の準備段階から寄港まで同行し、参与観察を実施。特にキャプテン、そして、ナビゲーターとしてこの航海に参加した2学生に重点的に話を聞く。

## 4) 2010年10月

3月のプログラム及び8月の航海に参加した学生たちや教員へのインタビュー調査を実施。

## 5) 2010年12月～2011年2月

テープ起こしや、データの整理、そして2011年のプログラムの準備。

## 6) 2010年3月6日～3月24日

ハワイで第二回のプログラムを実施。

今後アンケートやインタビュー調査などを今年度参加の学生対象に実施する。

**研究成果の概要 つづき**

もともとこのプログラムは、日本の商船高等専門学校の先生が、ハワイの伝統航海カヌーに出会い、そこで今の日本の教育にかけているものを感じたところから始まっている。きわめて高度な近代的海洋技術を教えている日本の商船高等専門学校。この学生が、ハワイの文化そして歴史、そして、ハワイ社会の成り立ちと深く関わっている航海カヌー、そして、現代的な航海計器をもちいない航海術を学ぶ。あらゆる面で異なる、「異文化」に遭遇し、学生たちは何を感じ取るのか、また、何かが彼らの中で変わっていくのか。もし変わっていくとしたら、何がその変化の媒体となったのだろうか。この研究を通してその点を明らかにしていくことで、海洋教育における、または、教育全般における「伝統知と現代技術の融合の可能性」に関して何らかの示唆が得られるのではないかと感じ、この研究をはじめた。

まだ、実施開始から2年目ということで、質的調査にしても結論を出すにはデータが不足している。これから数年かけて、インタビューや参与観察を続けていく必要がある。しかし、今年の調査を通して、今後の研究・調査の指針となる点がいくつか見えてきた。以下にそれを2010年度の研究成果の一部として列挙する。

- 彼らが日本で学ぶ航海計器を用いる航法と、ハワイで学ぶ航海計器を用いない航海術は必ずしも二つの異なるものではない。より身体的で感覚的な後者は、前者の理解を深め、補完的な作用をもち得る。この二つが相容れないものとなるのはどんな時か。なぜ、この二つがいま別ものとして存在しているのか、または、別なものとして存在しているように感じられているのか。このことは「人間と技術」の関係を考える上で有益。
- 学生の語りには「伝統(的)」とか「現代的/近代的」という言葉はほとんどでてこなかった。かれらはあるプログラムを振り返り、共鳴した事に関して例えば「あたたかい」「冷たい」などより感覚的な表現を多く用いていた。「現代航海技術」を学ぶ学生が「伝統航海術」＝伝統的な知を学ぶ、というくくり自体が問題かもしれない。このようなくくりをつくることで、「技術」と「知」、「現代的」と「伝統的」という分断を想定してしまっている。今後は「現代的」「伝統的」というものを所与のものとしてせず、いったい、その分類をしたい、分断があると思われるのはなぜか、それがどこからきているのかを深く考察していきたい。博士課程での研究のテーマに重ね合わせて言えば、それが人間と自然の関係を媒介する船、航海術から来ているのか、そうでないのかを考えることでもある。
- 「伝統的」「現代的」などの研究者の想定や、一般的なくくりを超えて、「あそこ(ハワイのカヌーコミュニティ)にあって」「ここ(日本の学校)にないもの」な何か。そして、それはなぜか。そして、その違いを学生たちがどう捉えているのかに焦点をあてて、今後は話を聞いていきたい。
- いまの海洋教育の基礎を築いてきた人たちへのインタビューを行い、彼らが「よかれ」と思い進んできた道、「安心、安全」を求め進んできた道をいまどう振り返るのか聞いてみたい。そこに次の手掛かりがあるような気がする。

まとめ：2010年度のSFR研究は、研究者が想定する枠組みや分類がバイアスとなることなど、これからの研究に有益な大切な問いや気づきをもたらしてくれた。また、データ数も数少ないという点でも、2010年度のSFR研究は予備調査・研究という位置づけが適切であろう。今後も関わりつづけていくこの教育プログラムをどのような視点から考察し、どのような問いを設定したらいいのか、昨年一年の研究を振り返りあらためて考え、今年度以降の研究に活かしていきたい。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

1) 日本国際理解教育学会 (6月18日, 京都橋大学, 発表予定)

2) East-West Center Graduate Students Conference (2012年2月, 発表予定)